

スピノザにおけるコナトゥスの現実性

黒 川 勲

【要 旨】 スピノザ哲学においてコナトゥスは主要な原理と見なされ、まず自己保存力、自存力を意味する。そして、現実的本質としてのコナトゥスが示す現実性は、スピノザにおいて経験的現実性と知性的現実性の二様に捉えられる。本稿では、『エチカ』におけるコナトゥス導出にかかわる諸定理を検討するとともに、想念的本質、形相的本質、観念的本質との対比によって、コナトゥスが示す二様の現実性を確認する。続いて、現実的本質と形相的本質に焦点を絞り、両者が重複して語られる地点から二様の現実性を担うコナトゥス概念の解明を試みる。

【キーワード】 コナトゥス 現実的本質 形相的本質 力能

はじめに

本稿の目的は、スピノザの「コナトゥス (conatus)」が示す「現実性 (actualis)」の解明を通して、スピノザにおけるコナトゥス概念の意義を明らかにすることにある¹⁾。問題となる定理は次のものである。

「各々のものが自己の有に固執しようとするコナトゥスは、そのもの自身の現実的本質にほかならない。(Conatus, quo unaquaeque res in suo esse perseverare conatur, nihil est praeter ipsius rei actualem essentiam.)」(E.3.P.7)

そして、本稿で注目する現実性についてのスピノザの見解は次のものである。

「われわれは二つの仕方によってものを現実的なものとして考える。すなわち、一定の時間と場所に関係して存在するものとしてか、あるいは神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結するものとして考えるかである。(Res duobus modis a nobis ut actuales concipiuntur, vel quatenus easdem cum relatione ad certum tempus, & locum existere, vel quatenus ipsas in Deo contineri, & ex naturae divinae necessitate consequi concipimus.)」(E.5.P.29.S)

本稿の論述を開始するにあたって、まず先の『エチカ』第三部定理7が導出される過程を検証し、コナトゥスが登場する場面での直接的な意味を確認する。続いて、スピノザにおける二様の現実性に基つきコナトゥス概念の整理を進めたい。

I コナトゥスの導出

ウォルフソンの整理に従えば、『エチカ』第三部「感情の起源と本性について」は主題的に四つに分かれたれ、コナトゥスが導出されるとともに基本的な受動感情が論じられるのは定理4から定理11までである²⁾。本稿では、特に定理4から定理8までをコナトゥス導出の過程と見なし論述を展開したい。

1 コナトゥス導出に先立つ諸定理等

コナトゥス導出の諸定理に先立つスピノザの言表では、まず「感情 (affectus)」に関して、感情が自然の秩序から独立した、いわば「帝国のなかの帝国 (imperinum in imperio)」のごとく自由で強力な人間の権能にあるものではないことが述べられる。すなわち、スピノザにとって感情は、他の個物と同様に自然の秩序と力において、「線や面あるいは物体の問題に対処したのと同じように」考察すべきものである(序文)。続いて諸定義であるが、その結果が当の原因から明白に知覚される原因を「十全な原因 (causa adaequata)」、たんに当の原因だけからは把握されないような原因を「非十全な原因 (causa inadaequata)」とする(E.3.D.1)。また、われわれが十全な原因となって事柄をなすならば「自ら働く (agere)」のであり、反対にわれわれが非十全な原因であるならば「働きを受ける (pati)」のである(E.3.D.2)。そして、『エチカ』第三部の主題となる感情は、身体そのものの活動力の増減を生ずる身体の変様であり、かつその変様の観念と見なされ、その感情は十全な原因および非十全な原因の区別に従い、「能動 (actio)」感情と「受動 (passio)」感情に区別される(E.3.D.3)。これらの諸定理に続く公準では、人間身体が活動力の増減をもたらすような多様な仕方で刺激を受けることを示すとともに(E.3.Postulata.1)、多様な刺激にもかかわらず、以前の刺激の印象あるいは痕跡を「像 (imago)」として保持することが確認される(E.3.Postulata.2)。

定理1から定理3では、スピノザが目的とする受動感情の認識に基づく能動感情による凌駕と制御の基盤が与えられている。「われわれの精神はある点では自ら働くが、ある点では働きを受ける (Mens nostra quaedam agit, quaedam vero patitur)」(E.3.P.1)、しかしそのことは精神あるいは身体が相互に直接的な仕方で制限を加えることを決して意味しない(E.3.P.2)。精神は身体に対して、あるいは身体は精神に対して無関係ではないが、相互に絶対的な権力を有してはいない。精神と身体はともに独立した「帝国」ではないのである。むしろ、スピノザにおいて心身は一体的に捉えられるべきものであり、その視点に依拠して、認識に基づき能動感情を生成し受動感情の凌駕と制御を目指すのである³⁾。ただし、それは認識に基づくものであるから、能動と受動と観念の特性との関係が示されていなければならない。

「精神の能動は十全な観念のみから生じ、反対に精神の受動は非十全な観念のみに依存する。(Mentis actiones ex solis ideis adaequatis oriuntur; passionibus autem a solis inadaequatis pendent.)」(E.3.P.3)

定理4から始まるコナトゥスの導出に先立つ諸定理等は、スピノザが目的とする受動感情の認識に基づく能動感情による凌駕と制御のための基盤的な概念が措定され、概念の道具立てが与えられていると見なすことができる。しかし一方で、これらの諸定理等が指し示す姿勢は、

伝統的な精神の身体に対する優位を抑制し、あるいは切り下げて、感情を身体そのものの活動力の増減や身体への多様な刺激によるその活動力の増減と見る見解に示されるように、身体を論述の全面に際立たせたものであることに注意しなければならない。むろん、最終的には十全な観念から精神の能動を獲得し、受動感情の認識に基づく凌駕と制御を企図しているのではあるが、それにしても心身を一体的に捉える新しい視点を媒介することによってであり、少なくとも続くコナトゥス導出の諸定理は身体あるいは物体を強調する文脈で読み解かれなければならない。

2 コナトゥスを導出する諸定理

コナトゥスの導出が開始すると目される定理4は次のものである。

「いかなるものも外的原因によらなければ破壊されない。(Nulla res, nisi a causa externa, potest destrui.)」(E.3.P.4)

われわれの一般に経験する世界は生成消滅が常態である身体的世界である。特に消滅はその原因探求の念を呼び起こす。その原因をスピノザは決してものの内部において認めず、外部に原因を限定する。定理4の証明は「定義 (definitio)」と「本質 (essentia)」の概念規定によってのみ行われている。ものの本質とは「それが与えられれば、そのものが必然的に定立され、除去されれば、そのものが必然的に消滅するようなもの (Ad essentiam alicujus rei id pertinere dico, quo dato res necessario ponitur, & quo sublato res necessario tollitur)」(E.2.D.2)である。この本質を知性によって与えるのが定義である。そうして見れば、定義が存立するならば、直ちに定義はその本質を肯定し、否定することはない。換言すれば、定義はものの本質を定立するのみであり、ものが破壊される場合には本質が位置する内部にではなく、外部に原因を有さなければならない。そして、このような破壊をもたらす外的原因は一方が他方に対して「対立的本性 (contraria natura)」をもつことになるが、反対に同一のものの本性においては対立的な本性は両立することはないのである。

「ものは一方が他方を破壊しうる限り、対立的な本性をもっている。すなわち同一の主体においては対立的な本性をもちえない。(Res eatenus contrariae sunt naturae, hoc est, eatenus in eodem subjecto esse nequeunt, quatenus una alteram potest destruere.)」(E.3.P.5)

すなわち、ものは外的原因を捨象する限り、すなわち「同一の主体においては (in eodem subjecto)」、まさにその本質によって自己同一性を保持するのである。そして、このものの自己同一性を保持する本質は『エチカ』第一部において、いわば定義づけられ、すでに与えられている。スピノザにおいてすべてのものは神においてあり、神によって考えられるものである以上、「個物は神の属性の変様、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態 (Res particulares nihil sunt, nisi Dei attributorum affectiones, sive modi, quibus Dei attributacerto, & determinato modo exprimuntur.)」(E.1.P.25.C)であり、「神はものの存在だけでなく、その本質の作用因でもある (Deus non tantum est causa efficiens

rerum existentiae, sed etiam essentiae.)」(E.1.P.25)のであるから、ものの本質は神の属性を一定の仕方で表現する様態としなければならない。そしてこのことは、神の存在と本質が同一であり (E.1.P.20)、また同時に神の本質と力能が同じものであることから (E.1.P.34)、ものの本質は神が活動する力能を一定の仕方で表現していることを示している。ものの自己同一性を保持する本質が神の力能の一定の表現であるならば、ものは自己自身でありつづけるような力を有することになるであろう。まずは、こうした証明内容によって定理6は提起されると考えられる。

「すべてのものは、それ自身においてある限り、自己の有に固執しようと努める。

(Unaquaeque res, quantum in se est, in suo esse perseverare conatur.)」(E.3.P.6)

しかしながら、この定理6の証明内容は証明の前半部分に属する。証明の前半部分が『エチカ』第一部を活用した存在論的・形而上学的枠組みからのものであるならば、後半部分はわれわれの一般に経験する生成消滅が常態である世界、いわば現にある身体的世界に目を向けた証明内容をふくみ、コナトゥス導出の過程にある定理4および定理5に直接依拠するものである。定理4によれば自己を破壊するものは外的原因であり、自己の内部に自己の「存在(existentia)」を排除するものはない。このことは、定理5によれば、ものが存在するならば外的原因を捨象し本質のみを注視する限り、ものはその存在を保持しようとする。そのことを踏まえた上で考察するならば、ものはその存在に固執し、破壊的な外的原因に対しては抵抗しようとすることを意味する。

この定理6の証明における定理5の使用については、カーリーにより、その使用の有用性についての疑念が指摘されている⁴⁾。しかしながら、ジョアキムも述べるように、ものは神の様態として神に「絶対的に (absolutely)」依存しているが、また時間と空間において自己自身を存在と作用によって表現する形態上の区別、「相対的な独立性 (relative independence)」を有している⁵⁾。ものを、特に時間と空間によって限定された身体的世界における物体を、神の絶対的な因果性から切り離して、「同一の主体において」、「それ自身においてある限り」といった独立性において注視するとき、その物体の根底に—それは本質に当たることになるが—その存在に固執し、破壊的な外的原因に対しては抵抗しようとする力を見いだすことは不当ではない。物体を独立した個々の事物と見なすこうした見方こそ、われわれが一般に経験する世界での自然な眼差しであり、むしろ生成消滅する物体にあって、その本質に持続的な力を見いだそうとするところにスピノザ独自の見解があると考えられる。カーリーの疑念も理由のないものではないが、本稿ではその疑念が生じる背景を定理6の証明の構成がもつ独自性と捉えなおしたい。すなわち、定理6の証明が存在論的・形而上学的枠組みからの前半部と経験的・身体的世界からの後半部の合成からなるという点である。定理6の証明においては、コナトゥスが示す一つの自己の有への固執が存在論的あるいは経験的に二様に捉えられ、これら二つの観点が重層関係を呈している。しかし、そのことを証明の不備と見るのではなく、スピノザが目的とする認識に基づく受動感情の能動感情による凌駕と制御のための基本的構造が端的に示されている特徴的な場面と考えたい。なぜなら、凌駕と制御を必要とする受動感情は経験的・身体的世界で現に生起している対象であり、それを認識に基づき能動感情を生成し、受動感情の凌駕と制御を達成するためには、スピノザにおいては独自の存在論的・形而上学的枠組みが不

可欠だからである。

このような定理4から定理6までの考察を踏まえて、スピノザは本稿冒頭で掲げたコナトゥスをもの「現実的本質 (actualis essentia)」とする定理7を提起する。この定理7の証明は、先の表現を使用するならば、まずは存在論的・形而上学的枠組みによる証明と見なすことができる。あらゆるものの本質は神が活動する力能を一定の仕方で表現している。そして、その本質からの活動は他の有り様の不可能な必然的な活動である。すなわち、その本質が「与えられた (data)」ならば、いかなるものも本質的な力を発揮するのである。そして、この本質的な力とは定理4から定理6までに示されたコナトゥスとしての力にほかならない。

「その故に、それ自身だけであるいは他のものとともにあることをなし、あるいはなそうと努める力能あるいはコナトゥスは、(この部の定理6より) 自己の有に固執しようと努める力能あるいはコナトゥスであり、ものそのものに与えられた、すなわち現実的本質にほかならない。(quare cujuscunque rei potentia, sive conatus, quo ipsa vel sola, vel cum aliis quidquam agit, vel agere conatur, hoc est (per Prop. 6 hujus) potentia, sive conatus, quo in suo esse perseverare conatur, nihil est praeter ipsius rei datam, sive actualem essentiam.)」(E.3.P.7.Dem)

この証明は存在論的・形而上学的枠組みによることを基本としているが、証明中の「与えられた」あるいは「与えられた、すなわち現実的本質 (data, sive actualis essentia)」という言葉に注目するならば、経験的・身体的世界で現に生起している事態を視野においていると見なすことができる。われわれにとっては経験的・身体的世界は所与のものであり、それ故に現実的に捉えられるものであるからである。この定理7の証明においても、コナトゥスの存在論的あるいは経験的な二様の把握、これら二つの観点の重層関係を見て取ることができるのである。こうしたスピノザのコナトゥスの把握は、続く定理8においても確認することができる。

「あらゆるものが自己の有に固執しようと努めるコナトゥスは、有限な時間ではなく、無際限な時間をふくんでいる。(Conatus, quo unaquaeque res in suo esse perseverare conatur, nullum tempus finitum, sed indefinitum involvit.)」(E.3.P.8)

コナトゥスはものの本質であり、神が活動する力能を一定の仕方で表現し、必然的な活動を行うものである。それ故に破壊的な外的原因を捨象する限り、ものの「持続 (duratio)」を制限する有限な時間をその本質内部にふくんでいるとは考えられない。むしろ、無際限な時間をふくんでいると考えなければならないのである⁶⁾。この定理の証明も存在論的・形而上学的枠組みによることを基本としているが、そのコナトゥスを取り扱う次元は「持続」である。スピノザにおいて持続とは「存在の無際限な継続 (indefinita existendi continuatio)」(E.2.D.5)であり、神の存在そのものの直接的な表現である「永遠 (aeternitas)」とは区別され、様態に関係づけられる特性である。また証明のなかにもあるように持続は「時間 (tempus)」に関係づけられるものであり、そのことは持続が有限な延長の様態、すなわち物体について言及されるものであることを意味している⁷⁾。再び、この定理8の証明においても、コナトゥスの存在論的あるいは経験的な二様の把握、これら二つの観点の重層関係を見て取ることができるの

である。

これまでコナトゥス導出に先立つ諸定理等を確認した上で、コナトゥス導出を担う定理4から定理8までの過程を検証してきた。そこから見いだされるスピノザのコナトゥスに関する考察は、人間の感情を論ずる『エチカ』第三部の主題に相応して、身体あるいは物体を強調し、経験的・身体的世界を視野の中心とする文脈で展開していると考えることができる。特に定理4から定理8までのコナトゥス導出の過程で直接に現れるコナトゥスの形象とは、まずものの自己同一性を保持し、自己を維持する力であり、それ故自己の有に固執する力となる⁸⁾。これが、すなわちコナトゥスが「自己保存力」、「自存力」と訳出される所以である⁹⁾。

しかしながら一方で、これらの定理の証明に見られるように、経験的・身体的世界に特徴的な外的事物や外的原因との関係を時に留保して、コナトゥスはものの本質の存在論的・形而上学的枠組みによる解明を中心に置いて定立されている。もちろん、定理6の証明に特徴的に見られるように、経験的・身体的側面が排除されているわけではない。むしろ、コナトゥスが示す一つの自己の有への固執が存在論的あるいは経験的に二様に捉えられ、これら二つの観点が重層関係を呈するなかで、コナトゥスは「現実的本質」として把握されるのである。つづいて、このコナトゥスが示す現実性の内実に関して論述を進めたい。

II 二様の現実性

本稿冒頭で掲げたスピノザの現実性に関する見解は、二様のものである。すなわち、「一定の時間と場所に関係して存在するもの」の現実性と、「神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結するもの」の現実性である。コナトゥスが、まず『エチカ』第三部において身体あるいは物体を強調し、経験的・身体的世界を視野の中心とする文脈で登場する以上、「一定の時間と場所に関係して存在するもの」としての身体あるいは物体が示すコナトゥスの現実性は、経験的・身体的世界における所与としての「経験的現実性」と見なさなければならない。

しかし一方で、コナトゥスの導出はものの本質の存在論的・形而上学的枠組みを中心に置いて行われている。スピノザの存在論においては、「自然において偶然的なものは存在しない。すべてのものは神の本性の必然性から一定の仕方では存在し作用するように決定されている。(In rerum natura nullum datur contingens, sed omnia ex necessitate divinae naturae determinata sunt ad certo modo existendum, & operandum.)」(E.1.P.29)また、すべての「産出されたものは、他の仕方でも他の秩序で産出されることはできなかった。(Res nullo alio modo, neque alio ordine a Deo produci potuerunt, quam productae sunt.)」(E.1.P.33)ものである。スピノザにおいて、すべてのものはその本質に関しても、その存在と作用に関しても神の本性の必然性から帰結する必然性の下にある存在者なのである。このような見解からすれば、須藤の言うようにスピノザの存在論において「可能的な」ものは決して存在しない。いわゆる、アリストテレス以来の「可能態－現実態」の対概念は存立しえない¹⁰⁾。すなわち、スピノザにおいてすべては必然的であり、かつ「現実的な」ものなのである。コナトゥスの導出の証明に見られたように、コナトゥスは存在論的・形而上学的枠組みから示される、いわば「知性的現実性」を有していると考えなければならない¹¹⁾。

そうしてみれば、コナトゥスは二様の現実性を同時に示しているとしなければならない。次

に、このコナトゥスの二様の現実性を整理・統合するために、スピノザにおいて現実的本質と対比的に関係すると考えられる「想念的本質」、「形相的本質」、「観念的本質」を検討して行きたい。

1 想念的本質と形相的本質

「想念的本質 (essentia objectiva)」と「形相的本質 (essentia formalis)」は、スピノザの方法的著作『知性改善論』において、「真なる観念 (idea vera)」を巡ってまとまって論じられている。スピノザは真なる観念について次のように言及する¹²⁾。

「真なる観念（実際、我々は真なる観念をもっているから）は、その対象とは異なるものである。なぜなら、円と円の観念とは別のものであるから。というのは、円の観念は円のように円周と中心をもつあるものではないからである。また、身体の観念は身体そのものではない。そして、観念はその対象と異なるものであるからには、それ自身によって知解しうるあるものであろう。すなわち、観念はその形相的本質に関して見れば他の想念的本質の対象でありうる。さらに、この他の想念的本質はまたそれ自体で見れば、実在的な知解しうるあるものであろう。そのようにして無限に進む。」 (§ 33)

ここで、想念的本質と形相的本質とが一つの観念の二つの捉え方によって区別されることが見て取れる。観念は、その観念の「対象 (ideatum, objectum)」とは「異なるもの (diversum)」であり、それ故「実在的なもの (quid reale)」、「それ自身によって知解しうるもの (per se aliquid intelligibile)」である。換言すれば、その観念自身も「それ自体 (in se)」で見れば、いわば別の観念の実在的对象でありうる。このことをさらにスピノザは、ペテロについての真なる観念の例をもって説明する。

「ペテロは、それ自身において実在的なものである。一方、ペテロの真なる観念はペテロの想念的本質であり、それ自身において実在的なもの、ペテロ自身と全く異なるものである。このようにして、ペテロの観念は自らの特殊な本質をもつ実在的なものであるから、また知解しうるものであろう。すなわち、ペテロの観念はそれが形相的にもつすべてを、それ自身の内に想念的にもつ他の観念の対象であろう。」 (§ 34)

すなわち、ペテロの観念は実在の人物ペテロの本質を想念的に（想われた仕方）で表現する想念的本質である。しかし、そのペテロの観念あるいはペテロの想念的本質もまた、形相的には（それ自体で）別の観念の実在的对象となりうるのである。想念的本質と形相的本質とは、「観念 [想念的本質] はまったくその形相的本質と一致すべきものである」 (§ 42 [] 内筆者) ことから分かるように、同一の本質の「観念的—自体的」あるいは「観念的—对象的」な二つの捉え方によって区別される各々の表現なのである。

このような想念的本質と形相的本質との関係は、『エチカ』において存在論的に確定される。

「この帰結として、神の思惟する力能は神の活動する現実的力能に等しいこととなる。すなわち、神の無限の本性から形相的に生じるすべてのものは、神の観念から同じ秩序と連

結によって神のなかに想念的に生じることになる。(Hinc sequitur, quod Dei cogitandi potentia aequalis est ipsius actuali agendi potentiae. Hoc est, quicquid ex infinita Dei natura sequitur formaliter, id omne ex Dei idea eodem ordine, eademque connexionem sequitur in Deo objective.)」(E.2.P.7.C)

スピノザにおいて、神は属性の類の異なりにもかかわらず同一の必然性によって、すべてのものを産出する。そのことは、観念の秩序と連結がものの秩序と連結に等しいことを意味する(E.2.P.7)。すなわち、観念としての想念的本質とその実在的対象としての形相的本質は、神の産出の必然性において厳格に対応しており、それらの表現の相違は先の捉え方の区別に過ぎないのである。

2 観念的本質と形相的本質

ウォルフソンは「観念的本質 (essentia idealis)」を現実的本質と対立するものとして捉えている。すなわち、現実的本質あるいは与えられた本質とは異なり、観念的本質は精神の外部にもものが存在すると存在しないにかかわらず、精神のなかに存在するものの概念と見なししている¹³⁾。本稿では、観念的本質と現実的本質との関係に先だって、まず観念的本質と形相的本質の相違について検討しておきたい。

観念的本質に関しては、『エチカ』において語句としての明確な言及はない。観念的本質が明示的に言及されるのは、ウォルフソンが依拠しているようにスピノザの『国家論』においてである。

「すべての自然物について、人はそれが存在すると存在しないにかかわらず、十全な概念をもちうる。それ故に自然物の存在の始まりおよび存続はものの定義からは結論されない。なぜなら、ものの観念的本質はものが存在し始めた前と後とで同一だからである。したがって、それらのものの存在の始まりがその本質から帰結しえないように、その存在の存続もその本質から帰結されない。むしろ、それらが存在し始めるに必要な能力がその存続のために必要なのである。このことから、自然物が存在し、したがって活動する力は神の永遠な力能にほかならない。」¹⁴⁾

この言表から見て取れることは、自然物が現に存在する存在しないにかかわらず、「十全な概念」、「定義」、すなわち観念的本質は存在しうる。しかし、自然物が現に存在するならば、その存在の始まりおよび存続は観念的本質に基づくのではなく、「神の永遠な力能 (Dei aeternapotentia)」によるということである。こうした見解に密接に関係する『エチカ』における言表は、次のものである。

「存在しない個物や様態の観念は、個物あるいは様態の形相的本質が神の属性にふくまれているのと同じように、神の無限の観念のなかにふくまれていなければならない。(Ideae rerum singularium, sive modorum non existentium ita debent comprehendi in Dei infinita idea, ac rerum singularium, sive modorum essentiae formales in Dei attributis continentur.)」(E.2.P.8)

これら『国家論』および『エチカ』の言表から、スピノザにおいて、存在しないものの観念あるいは観念的本質も神の思惟において認められなければならない。しかしながら、ものが現に存在することに注目するならば、そのものの観念的本質とともに、むしろそれに先だって形相的本質が存在しなければならないのである。そして、この形相的本質は「自然物の存在の始まりおよび存続 (*rerum naturalium existendi principium, perseverantia in existendo*)」を担うものであり、かつ神の力能によって確立されるものである。このことは、形相的本質が自己の有に固執する力、すなわちコナトゥスを意味し、しかも本稿の考察にしたがえば存在論的・形而上学的枠組みによって見いだされるコナトゥスを指し示している。

これまで、想念的本質と形相的本質および観念的本質と形相的本質の關係に注目して考察してきた。想念的本質と形相的本質は、同一の本質の「観念的—自体的」あるいは「観念的—對象的」な二つの捉え方によって区別される各々の表現であり、観念的本質と形相的本質はものの「存在—非存在」の観点から言及されるものである。すなわち、観念的本質はものの「存在—非存在」にかかわらず、神の思惟において認められなければならないが、形相的本質は特にものが現に存在する際には、そのものの観念的本質とともに、むしろそれに先だって形相的本質が存立していなければならない。そして、この形相的本質は神の力能を表現する存在論的・形而上学的枠組みから把握されるコナトゥスなのである。こうしたことから、本稿で問題としている現実性について指摘しておくならば、形相的本質としてのコナトゥスが示す現実性は知性的現実性で見なすことができる。それでは、この形相的本質と知性的現実性は、コナトゥスが導出される際に見いだされた現実的本質の現実性、そして特に経験的現実性とどのように関係しているのだろうか。

3 現実的本質と形相的本質

河井は現実的本質と形相的本質を、それぞれ「持続の下で」の個物の本質と「永遠の相の下で」の個物自身を意味し、現実的本質と形相的本質とは個物において永遠存在と「同時に」持続存在をふくむとしている¹⁵⁾。こうした見解の根拠はスピノザの次の言表による。

「個物の存在が神の属性のなかにふくまれている限り、その個物の想念的存在あるいは観念も神の無限な観念が存在する限り存在することになる。そして、神の属性のなかにふくまれている限りにおいてのみならず、それが持続するといわれる限りにおいても存在すると称される場合には、そのものは持続するといわれる観念をもふくむことになる。(Hinc sequitur, quod, quamdiu res singulares non existunt, nisi quatenus in Dei attributis comprehenduntur, earum esse objectivum, sive ideae non existunt, nisi quatenus infinita Dei idea existit; & ubi res singulares dicuntur existere, non tantum quatenus in Dei attributis comprehenduntur, sed quatenus etiam durare dicuntur, earum ideae etiam existentiam, per quam durare dicuntur, involvent.)」
(E.2.P.8.C)

確かにこの言表から、個物が現に存在する限り、形相的本質が「神の属性のなかに」ふくまれていることになる。また、この形相的本質には「神の思惟において」想念的本質あるいは観

念的本質が存在することになる。そして、形相的本質が「持続するといわれる限り」、すなわち同時に現実的本質と見なされる場合が存在し、その際には想念的本質あるいは観念的本質もまた「持続するといわれる観念」と見なさなければならない。

スピノザにおいて、現実的本質と形相的本質とが重複して捉えられる場面が存在する。それでは、この現実的本質が示す現実性は形相的本質が示す知性的現実性そのものなのであろうか。このことは直ちには肯定できない。なぜなら、先の現実的本質と形相的本質とが重複して捉えられる次元は、「持続」の次元であり、それはすなわち経験的・身体的世界における所与としての「経験的現実性」を意味していると考えなければならないからである。しかしながら、スピノザにおいて現実的本質と形相的本質とが重複して捉えられることを基点とするならば、知性的現実性と経験的現実性とは明らかに異なる概念であるにもかかわらず、同様に一つのものとして関係づけて捉えられなければならないのである。確かに、スピノザにおいてコナトゥスは二様の現実性を同時に示している。最後に、本稿での考察を踏まえ、このコナトゥスの二様の現実性を統合的に見るための一定の見解を示し、スピノザにおけるコナトゥス概念の意義についてまとめておきたい。

結語

本稿において、これまでコナトゥス導出に先立つ諸定理等および特に定理4から定理8までのコナトゥス導出の過程を検証することによって、「自己保存力」、「自存力」としてのコナトゥス、すなわち一つの自己の有へ固執する力は存在論的あるいは経験的に二様に捉えられることが明らかとなった。また、想念的本質、形相的本質、観念的本質の検討によって、コナトゥスは存在論的に神の力能を表現する形相的本質と見なされることが確認された。それでは、この定理7に見られる現実的本質としてのコナトゥスが示す現実性は形相的本質が示す知性的現実性に尽きるものなのであろうか。一方で、スピノザにおいて現実的本質と形相的本質とが重複して捉えられる場面が存在しているが、その次元は経験的・身体的世界における持続の次元であり、現実的本質としてのコナトゥスが示す現実性は経験的現実性をも意味していると考えなければならない。こうしたことを踏まえ、スピノザにおいて現実的本質と形相的本質とが重複して捉えられることを基点とするならば、知性的現実性と経験的現実性とは明らかに異なる概念であるにもかかわらず、同様に一つのものとして関係づけて捉えられなければならないのである。それでは、スピノザにおいて、二様の現実性を同時に示すコナトゥス概念は、どのように理解されなければならないのであろうか。

本稿では、コナトゥスがなによりもまず「力」の概念であることとともに、人間が経験的・身体的世界に存在しながら「想像力—知性」の二つの認識能力を有していることに注目してとりまとめを行いたい。力とはものの在り方について、特にその変化を統合的に説明しようとする概念である。スピノザは、この統合的な力の概念を支柱として一元的な体系を構築していると考えることができる。スピノザ哲学の中心は神であるが、神の存在と本質が同一であり (E.1.P.20)、また同時に、その神の本質は力能そのものである (E.1.P.34)。すなわち、スピノザにおいて神が存在し活動することは、神の本質的力能から説明されるのである。そして、個々の精神および身体は、この神の様態として存在論的に位置づけられる。それ故、スピノザの体系は「力能の存在論」と見なすことができるのである。こうした眼差しからすれば、本稿で論

じたようにコナトゥスは存在論的にもものの形相的本質を指し示すことになるだろう。ひるがえって、経験的・身体的世界に目を転じるならば、現にある物体の生成消滅あるいは変化において、その本質に持続的な力を見いだすことになるだろう。むしろ、物体の生成消滅あるいは変化の背後に力が潜んでいるのではなく、「力の現象」している在り方が生成消滅あるいは変化なのである。このことが、スピノザによって、複数のものが協働している限りそれらは一つの個体と見なされ (E.2.D.7)、または感情が身体そのものの活動力の増減と見なされる (E.3.D.3) 所以でもある。

ところで、われわれ人間は所与としての経験的・身体的世界に存在している。そこでの人間の直接的な認識活動は感覚的認識をも含意する「想像力(imaginatio)」によるものである。スピノザにおいて、想像力とは、ものを「現在の(praesentia)」、「観想する(contemplari)」能力である¹⁰⁾。人間は経験的・身体的世界においては想像力によって、物体を現実的事物として、そしてその本質的な力を現実的なものとして把握せざるをえないのである。このことはコナトゥスの経験的現実性に相応する。しかし同時に、その本質的な力の起源と本性を存在論的に、知性によって認識しようとするならば、コナトゥスは神の力能の表現として必然的であり、それ故現実的に把握されることになる。すなわち、コナトゥスは知性的現実性を示すのである。こうして見れば、現実的本質と語られるコナトゥスは「想像力—知性」の各々において二様の現実性を示しながらも、「一つのもの」と考えなければならない。換言すれば、「一つのもの」であるコナトゥスが、「想像力—知性」の各々の認識能力において、それぞれの現実性を示すと考えざるをえないのである。スピノザ哲学においてコナトゥスは、知性の存在論的世界を経とし想像力の経験的世界を緯とする、まさに経緯の交錯点、それ故に両世界の転換点に位置するのである。このことは、受動感情の認識に基づく能動感情による凌駕と制御のための基盤として、スピノザ倫理学の主要な原理となるであろう。しかしながら、コナトゥスのスピノザ倫理学における役割については稿をあらためたい。

註

『エチカ』からの主な引用文には、その末尾に引用箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理13の補助定理3の後にある公理は、E.2.post P.13-L.3.A.2である。また、D.は定義、Dem.は証明、C.は系、S.は注解を指す。また、本稿の論述において重要と見られる定理等については、引用文に原文を付す。原典は次の通りである。Spinoza : *Ethica, Opera Bd. II*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972.

1) 本稿の考察に当たって、河井徳治氏および須藤訓任氏の著作から多くの示唆を受けた。

河井徳治、「コナトゥス概念の原理的諸相」、『スピノザーナ』、7巻、スピノザ協会、2006

河井徳治、『スピノザ哲学論攷』、創文社、1994

須藤訓任、「「現実的」であることは何を意味するか—スピノザの「自己」—」、『思想』、第6号、岩波書店、2003

2) Wolfson, Harry Austryn : *The Philosophy of Spinoza*, vol. 2, The World Publishing Company, 1965, p.185

3) スピノザの存在論・形而上学においては、精神と身体は本来同一のものであり、同じ一つのものが

神の思惟の属性の下で把握されるとき精神と呼ばれ、神の延長の属性の下で把握されるとき身体と呼ばれる。特に精神と身体との同一性がコナトゥスにおいて見いだされることは、拙稿「精神の能動とConatus—スピノザ感情論の基盤—」、『シンポジオン』、第45号2分冊、広島大学哲学研究室、1999.において論じている。

- 4) カーリーによる疑念とは、定理6は定理4から直接帰結できるものであり、定理5をコナトゥス導出に際して不必要とする、定理の必要性にかかわる疑念である。Curley, Edwin: Behind the Geometrical Method, Princeton University Press, 1988, p.109
- 5) H.H.joachim :A Study of the Ethics of Spinoza, Russell & Russell, 1964, pp.191-192
- 6) 無際限は、その算定の不可能性、数の概念を超越し数の概念に矛盾することから生じる。スピノザは数の概念および時間の概念に「限界のない」ことからではなく、「算定しえない」ということから無限と呼ばれるものは、その理由が異なる故に実体的な「無限 (infinitus)」とは区別され、むしろ「無際限(indefinitus)」と呼ばれなければならない、としている。(Spinoza: Epistolae, Spinoza Opera Bd.IV, Epistola 12.) スピノザの無限に関しては、拙稿「スピノザにおける神の無限について」、『哲学』、第45集、広島哲学会、1993.において論じている。
- 7) 持続が時間に関係づけられ、物体に関して記述されるものであることは、E.2.P.44.Sに言及がある。
- 8) 本稿では、コナトゥス導出の諸定理を文脈上、身体あるいは物体的側面を強調して読み解こうとし、コナトゥスの経験的性格を見逃さないようにしている。こうした姿勢は、スピノザがコナトゥス論を形成する背景となったデカルトのコナトゥスの捉え方からも傍証される。

デカルトは『哲学原理』第二部37節でコナトゥスを提起している。そこでは、いかなるものも「それ自身においてある限り (quantum in se est)」、同じ「状態 (status)」に「固執しようとする (perseverare)」のであり、いったん動かされればいつまでも運動し続けることが第一の自然法則と見なされている。すなわち、すべての物は同じ状態を維持し、「外的原因 (causa externa)」によってでなければ決して変化しないのである。このデカルトの見解は明らかに物体とその運動においてコナトゥスを見いだそうとするものである。(Descartes: Principia Philosophiae, Oeuvres de Descartes VIII, Publiees par Adam & Tannery, Librairie Philosophique J.VRIN, 1996, p.62)

こうしたデカルトの見解を受けて、スピノザにおいても『形而上学的思想』第一部第6章のなかで「ものと自己の状態に固執しようとするコナトゥスとはどのように区別されるか」と題して、「運動は自己の状態に固執しようとする力 (vis) をもつ (Spinoza : Cogitata Metaphysica, OperaBd. I, p.248)。この力は運動そのものである。」と述べている。もちろん、後の『エチカ』におけるスピノザのコナトゥスは物体的運動のみにとどまる概念ではないが、少なくともその概念の起源は物体的運動にあると見なすことができる。ただし、先の『形而上学的思想』の言表に見られるように、スピノザは運動を力そのものとして捉える新たな視点を導入している。これは、デカルトとは異なるスピノザ独自の視点である。この視点の延長上で、「われわれは生命 (vita) をものが自己の有に固執する力と知解する」(『形而上学的思想』第二部第6章 Spinoza : Cogitata Metaphysica, p.260) として、コナトゥスを存在者全体の原理と見なす立場が形成される。

- 9) コナトゥスは本文に示したように、一般に「自己保存力」、「自存力」と訳出される。また一方で、「努力」とも訳される。しかしながら、本稿ではコナトゥスの経験的・身体的世界および存在論的・形而上学的枠組みでの特徴を強調する立場から、倫理的意味合いが濃厚な「努力」の訳語はとらない。ものの自己の有に固執する力、自己の有への内在的傾向力として、先の訳語にとどめる。

- 10) 須藤、前掲書、p.87
- 11) スピノザにおいて、神の諸属性と神の変様を把握するものは知性である (E.1.P.30)。それ故、存在論的・形而上学的枠組みから捉えられる現実性を知性的と呼びたい。
- 12) Spinoza: Tractatus de intellectus emendatione, Opera Bd.Ⅱ.なお、『知性改善論』からの主な引用箇所はブルダー版による文節番号を本文中に示す。
- 13) Wolfson, pp.198-199
- 14) Spinoza: Tractatus Politicus, Cap.2. § 2, Opera Bd.Ⅲ.p.270
- 15) 河井、『スピノザ哲学論攷』、第2部第6章第2節
- 16) スピノザにおいて想像力とは、まず「身体の変様の観念 (idea affectionis Corporis)」であり、ものを現在の、観想する能力である。そして、この能力は諸観念の連結に注目するならば「記憶 (memoria)」の意を含むものである。また、スピノザは想像力を、自らの認識論における区分において「第一種の認識 (cognitio primi generis)」として、感覚を示す「漠然とした経験による認識 (cognitio ab experientia vaga)」及び「記号から (ex signis)」形成されるある種の認識を意味するものとして用いている。すなわち、スピノザにおいて想像力は原初的な認識であるとともに、多様な意義を示すものである。一方、このように多様な意義をもつ想像力は、「理性 (ratio)」による認識を示す「第二種の認識」及びいわゆる「直観な (intuitu)」認識を示す「第三種の認識」と厳格に区別され、虚偽の唯一の原因として、一括して否定的に位置づけられている。(拙稿「スピノザにおける *imaginatio* について」、『シンポジオン』、第51号2分冊、広島大学哲学研究室、2006)

付記：本稿は平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。

The Actuality of “Conatus” in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA Isao

Abstract

In this paper I tried to understand Spinoza’s concept of “conatus” or “endeavor to persist in its own being”. For this purpose I regarded the investigation into signification of two kinds of actuality in conatus as the actual essence. In order to solve this problem, I would consider propositions concerning conatus in his *Ethica*. And I would examine Spinoza’s thoughts of the actual essence and the formal essence. In Spinoza’s philosophy, though the actuality of conatus expresses each actuality in imagination and intellect, the actual essence and the formal essence signify the same one in conatus.

【Key Words】 conatus, actual essence, formal essence, power